

常行堂

848年に円仁（西暦794-864）が歩行瞑想の修行の道場として、常行堂を建立しました。このお堂の名前の由来である常行三昧がここでは行われています。この修行においては、修行者は御堂の中央にある仏像の周りを90日間、休むことなく、念仏を唱えながら歩きます。伝統によると、この修行を無事に成し遂げれば、阿弥陀如来が僧侶の前に現れると言うのです。現在の建物ができたのは江戸時代（西暦1603~1867）のことです。

四体の菩薩に伴われた王冠を被った阿弥陀如来が、常行堂の本尊です。この阿弥陀如来の安置のされ方はあまり一般的ではなく、日本ではここだけ。通常阿弥陀如来は蓮子の花に鎮座した形で現れます。しかしこの常行堂では、阿弥陀と四体の菩薩が孔雀に両足をまたがり座っています。孔雀は毛虫と昆虫を食べるので、孔雀は清潔の象徴とされている。孔雀は心の害虫である“疑い” “恐れ” “怠慢”などを食べることから、人間の心を清浄に保つとされているのです。この阿弥陀は、王冠を被っています。通常、仏陀は悟りへの到達を意味するために、頭には何も乗っていません。その一方で、悟りを開いた仏陀より低い階級である菩薩が王冠を被っているのは、菩薩が高貴な地位だけでなく、人間の存在にも近いことも意味しています。阿弥陀の王冠は、前述のような考えが発達する前の時代に立ち返った、古代の曼荼羅をイメージしています。